殿様におとぎ話を聞かせた子どものはなし ㊁

むかしむかし、たいへんおとぎ話の好きな殿さまがお城に住んでいたんだどぉ。家来どもは夜になると殿さまによばれて、むかしばなしをしたが、長続きがせずに殿さまは閉口しておられたんだどぉ。やがて領内にお布告をだして「だれぞ殿さまに満足におとぎ話をした者にはごほうびをくださる。」ということになったんだどぉ。すると城下町のそとの山に住む一人の子どもが召し出されて城にゆくことになったんだどぉ。子どもは殿さまの前につれてゆかれてたっぴらに手をついたんだどぉ。殿さまは「面をあげぃ。家来に聞いたが、たいそう利口な子どもとはその方か。一つ今晩からわしに長い話をしてくれ。」殿さまは上きげんにこういうと、家来に菓子などもってこさせてもてなしたんだどぉ。

夜になってその子どもは何を話すかと、殿さまや家来どもは百匁ローソクのゆらぐ座敷にかたつばのんで待っていたんだどぉ。子どもはこんな話しをしはじめたんだどぉ。「あるお城の石垣の小さな穴から、一匹の蛇が春になってはい出し、かま首もたげていたどぉ。それを見つけた子どもは『どれほど長いか一つためしてみよう』と手づかみでかま首をつかんで、その穴からとり出したんだどぉ。小さいのですぐ尻っぽが出るかと待っていると、その蛇の長いこと、にょろにょろ、いつまでつかみだしてもきりがない。にょろにょろ。出るわ出るわ。今日もにょろにょろ、あしたもにょろにょろ。あさってもにょろにょろ。さてさて困りきってやめる分にいかなくなって、十日たってもにょろにょろ。二十日たっても、一ヶ月たっても同じことをくりかえすばかり。」子どもはもっと続きを話そうとしたら殿さまはこうよびとめたんだどぉ。「ウーム。感心な子どももあるもんだ。こんなに長い話しではわしもかなわん。参った。早速思う存分ごほうびをとらすぞう。」